

友の会通信

vol. 8, No.2, 通巻 44 号 2004.6.26 発行

博物館周辺の身近な自然シリーズ(その4)

博物館周辺で見られる鳥たち

学芸員 加藤 ゆ き

この博物館に就職して、博物館周辺で50種以上の鳥を確認してきました。今回紹介するのは、そのうちの一部です。しかし、紹介したとおりに鳥が出現するとは限りません。なんといっても生きもの相手なので、100%確実とは言えないからです。鳥見の成果は、その年の気候やタイミング、そして見る人の運（これが一番大きな要因?）に左右されることを念頭において、博物館周辺を歩くときの参考程度にしてください。

1, 博物館で繁殖する鳥たち

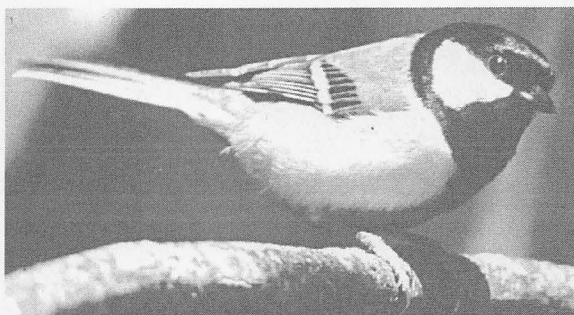
博物館の敷地内では、年間を通じて20種以上もの鳥を見ることができます。トビやキジバト、ツバメ、コシアカツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ビンズイ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、イソヒヨドリ、ツグミ、シロハラ、ウグイス、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラスなど、もしかしたらもっと他の鳥がいるかもしれません。このうち、何種かは敷地内で繁殖しています。

キセキレイは植木の中に小枝と葉を組み合わせた巣を作っていました。少し前に3羽のかわいらしいヒナを確認しました。ハクセキレイは地下駐車場に巣を作ったようです。歩道橋から見ていると、虫をくわえた親鳥が地下駐車場へ飛び込んでいきますが、場所は確認できていません。イソヒヨドリは地下駐車場で子育てをしていましたが、先日、無事に3羽のヒナが巣立ちました。新井学芸員によると、今シーズン2回目の繁殖を行う可能性もあるとか……。楽しみですね。ムクドリは巣材をくわえて、建物の通気穴にしきりに出入していました。穴の奥には、草をぐるぐると丸めた

目次

身近な自然シリーズ…… 1	植物ノート……… 5
サロン・ド・小田原…… 3	城ヶ島地層観察会… 6
“この一冊” …… 3	友の会NOW……… 7
早川水系自然観察会…… 4	情報クリップ……… 7
アサギマダラ調査会…… 4	ボランティアメッセ… 7
城山植物観察会……… 5	行事案内……… 8

シジュウカラ



ような巣があるに違いありません。また、シジュウカラが巣材をくわえて出入りしている植木もありました。近くに行くと、チィチィという細い声が聞こえてくるので、元気なヒナがふ化したのでしょう。

番外編としてみなさんに大人気のカワセミを紹介しましょう。実は、博物館横を流れる早川は、カワセミの観察ポイントとして最適なところですよ。今年、カワセミの子育てはうまくいったらしく、5月下旬には木の枝に止まっているヒナを確認しました。ヒナはしばらく、親鳥と一緒に飛び回っているの、運がよいと、ちょっと黒ずんだ羽色をしたヒナときれいな翡翠色をした親鳥と一緒に見られるかもしれません。ちなみにカワセミ同様に人気の高いヤマセミは、以前は職員通用口のあるテラスから、早川横の木にとまって羽づくろいをする光景を楽しめましたが、河川敷の工事が始まったとたん見られなくなりました。ちょっと残念です。

2, 長興山で夏鳥を楽しむ

長興山といえば、博物館で行っている「身近な自然発見講座」の主なフィールドです。講座の実施時期やお勧めコースなどは、「友の会通信」の通巻41号・42号で勝山学芸員が紹介していますので、そちらを参照してください。

ここでは、5月に入るといろいろな夏鳥を楽しむことができます。一番の目玉はサンコウチョウ。吾性沢方面に行くと、複数のサンコウチョウがさえずっていることがあり、運がよいと、姿を見ることができます。前に行った身近な自然発見講座では、目の前で一度にオス3羽が、長い尾をひら

ひらとさせながら飛び回っている光景を、たくさんの方が観察したこともあります。しかし、6月になると、他の地域へと移動するらしく、さえずりを聞くことはなくなります。サンコウチョウにとって、長興山はあくまでも渡りの途中の中継地といった位置付けのようです。

オオルリも長興山の常連さんです。今年は渡来が少し遅く、5月下旬にやっと確認しました。沢沿いの林で「チューピーピーピピチュー」とさえずり、最後に「ジジ」と鳴くのが特徴です。非常にまれにアカショウビンも見られます。今年は確認していませんが、昨年は5月下旬に吾性沢でさえずりを聞きました。「キョロロロロロ」というちょっと変わったさえずりをするこの鳥は、カワセミの仲間で全身が赤く、カニやカタツムリが大好物です。この他に、ヤブサメやヨタカなども渡来します。

また、夏鳥だけではなく、冬鳥も楽しむことができます。クロジやアオジ、アトリ、シロハラなど、地味ですがかわいらしい小鳥を見ることができます。ただし、日陰が多いので、寒さ対策を忘れずにしてください。

3, 石垣山で猛禽類を探す

博物館から一夜城へとのはる道は、猛禽類を比較的観察しやすいルートです。登り口の早川では、ミサゴが魚を狙って上空を飛んでいることもあります。

山道に入って、出現率が一番高いのは、トビとオオタカです。トビはのんびりとしたイメージが強く、猛禽類には見えませんが、立派なタカの仲間です。オオタカは、石垣山では普通に見ることができます。出現率は50%といったところでしょうか。この鳥は種の保存法の「国内希少野生動植物種」に指定されており、国内ではよほどのことがない限り捕獲、飼育は認められていません。しかし、愛玩用として人気が高く、密猟が後を絶ちません。つい先日違法捕獲による摘発があったばかりです。しかし、手元においてその姿を愛でるより、大空を飛び回るほうが美しい、と思うのは私だけでしょうか。

冬になると、ノスリが上空を舞います。トビより少し小さな猛禽類で、トビによく似ていますが、トビの翼の下面は茶色、ノスリは白色なので見分けるポイントにしてください。この他に、運がよいとハイタカやツミといった小型の猛禽類も見られることもあります。がんばって探してみたい

かがでしょう。

4, 外来種4種

いままで原稿を書いてきて、意図的に文章からはずしたグループがあります。それは外来種（移入種）です。現在、博物館周辺では4種を確認しています。一番見やすいのは、地下駐車場にす



ガビチョウ(重永明生氏撮影)

みついているドバトです。諸説ありますが、鎌倉時代までに愛玩用として日本へ持ってこられたものが、野外で増えていったようです。今では、駅や公園などで多数を見ることができます。

林の中で「チョットコイ チョットコイ」と鳴くコジュケイは、1919（大正8）年に東京都や神奈川県で狩猟用に放鳥したものが各地で増加し、現在は北海道と一部島嶼を除く日本全国で普通に見ることができます。博物館周辺でも鳴き声をよく聞きますし、早朝には道端に出てきて、エサを採る光景も見かけます。

この他、ニューフェイスとしてガビチョウとソウシチョウが挙げられます。ガビチョウはクロツグミやイカルによく似た声でさえずる、ツグミくらいの大きさの鳥です。全身が茶色で目の周りが白色とちょっとかわった羽色をしています。ソウシチョウはオリーブ色の身体に赤いくちばしがよく目立つ、スズメ大の鳥です。「ジュイジュイ」「チュリリリ」とさえずりますが、ガビチョウほど目立たないようです。この2種は、ここ数年で爆発的に増え、長興山や石垣山をはじめ神奈川県西部では普通に観察できます。調査などで長興山を歩いていると、イカルの代わりにガビチョウがさえずり、ウグイスの代わりにソウシチョウが竹やぶをガサガサと移動している、といったような感じです。

今回紹介した内容は、講座や調査で分かったことを元に、新井学芸員や鳥類ボランティアの大越さん、そして館の職員など、いろいろな方から情報をいただき作成しました。ありがとうございました。

アオバトのふしぎ

なぜ海水を飲みにくるのだろう

演者 こまたん (高麗山・花水川)
探鳥会

★アオバトと人の共存する海岸と岩礁

大磯町の照ヶ崎海岸は、大磯港の防波堤の西側に位置する小さな岩礁地帯です。春から秋に、釣りをする人、磯遊びをする子どもたち、砂浜でバーベキューを楽しむ家族連れ、犬と散歩をする人など大勢の人たちが楽しんでます。

そんな岩場が1996年2月に神奈川県天然記念物に指定されました。それはアオバトが海水を飲みに群れでやってくるからです。100羽以上の群れも観察されます。たぶん日本最大の飛来地ではないかと思われます。今までの観察ではアオバト以外にも多くの野鳥がここを訪れています。

★照ヶ崎のアオバト

大磯から20～30km離れた丹沢山地。アオバトはこの辺りから飛んでくるものと思われます。

群れを作って岩礁の上を飛び回り、岩場に降ります。窪みに溜まった海水にくちばしを浸けて、

吸い込むように飲みます。海面に浮かんだり、尾羽や脚を海水に浸けるものもあります。このような行動をするのは、果実を主食としているために不足するミネラルを補っているのではないかと推測されていますが、まだよく分かってはいません。

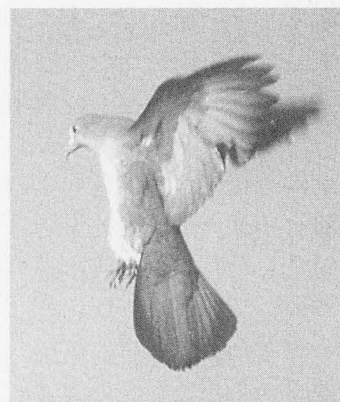
照ヶ崎への飛来は5月初め頃から11月半ばまで続き、7月から8月にかけてピークを迎えます。夜明けから午前中が飛来数の多いときです。なるべく早朝の方が大きな群れが観察されるチャンスが多いようです。朝日に輝くアオバトの美しさは、一度見ると忘れられなくなることを保証します。

人間と野鳥が共存している海岸と岩礁を、いつまでもこのままの状態で維持していきたいものです。

アオバト

(Japanese Green Pigeon)

アオバトは全長33cmの中型のハトで、全体が緑色の美しい羽色です。頭から胸にかけては黄色味が強く、腹部は白っぽい色です。



▶▶▶わたしの選ぶ"この一冊"

学芸員 新井一政

少年少女最新科学全集 第12巻

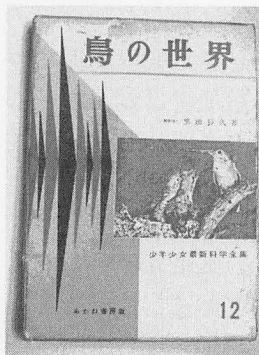
『鳥の世界』 黒田長久著

友の会に新しく発足した「広報グループ」から、私にとっての“この一冊”を紹介して欲しい、との連絡が届きました。そう言われて真っ先に思いつくのは、黒田長久著『鳥の世界』以外にありません。小学4年生の秋に学校の図書室で出会い、卒業するまで何回も読み返し、中学1年の時には自分用を手に入れました。

著者・黒田博士が巻頭に、「この本は一中略ー(鳥の)種類のお話ではなく、鳥の生活をのべたものです。そのために、なるべくひろく、また、さいきんのいろいろな研究をとりいれました。」と記しているように、鳥の感覚や体の仕組み、さまざまな生態、野外観察の方法等々を10の章に分けて、世界各地から集めた豊富な写真と詳細な図をふんだんに使用し、わかりやすい言葉を選んで解説してあります。夢中で昆虫を追いまわしたり、魚や小鳥を捕ったり飼育したり、単なる“動物大

好き少年”であった私に、鳥だけではなく生きものを科学的に見るきっかけをこの本が与えてくれました。また、掲載されている写真や解説と同じ行動・動作や現象を、野外の鳥で実際に観察できた時にあじわった感激は、今でもはっきりと覚えています。

現在、私の手元にあるのは1961年出版の「あかね書房版」です。外箱には、1959・60年連続産経児童出版文化賞受賞と朱書きされています。出会いから45年を経た今、改めてページを繰って驚いたのは、その内容が現在でも決して古めかしくなっていないことと、「鳥の世界」全般をこれだけ簡潔にまとめて紹介した書物に、その後一度もお目にかかっていないということでした。残念ながらこの本は現在絶版になっています。



「博物館周辺の身近な自然観察会」

2004.5.22(土) 曇り

- コース 入生田駅—長興山・紹太寺—塔ノ峰—阿弥陀寺—塔ノ沢—箱根湯本駅
- 参加者 46名(小中学生から最高齢者は82歳、男性26名 女性20名)

『早川水系の自然(森)の中に、文化と歴史を訪ねる』というテーマで楽修するこの企画、Part4は友の会通信で連載の「博物館周辺の身近な自然シリーズ・その2」で紹介された「長興山自然探索ガイド(勝山学芸員)」の塔ノ峰コースを選びました。小田原口から箱根外輪山への地図にはない登山コースを辿り、博物館周辺の自然にまた一つ、新しい発見がありましたでしょうか。今回は試みとして、参加者同士の連携を考えた自然倶楽部オリジナルの名札を着けて観察会に臨んでもらいました。豊かな雑木林の中をオオルリ、ホトトギス、シジュウカラ、コゲラなどのさえずに誘われて全員が無事に下山、懇親会でも観察会の余韻を楽しむことができました。

(自然倶楽部 佐藤昭男)



阿弥陀寺の前で
「歴史の解説」

●「自然観察会」に参加して

講師の先生の説明と友の会の歴史資料で長興山紹太寺、荻窪用水、阿弥陀寺などを実地検証した気分になりました。枝垂桜以外は知らなかったもので、次回の長興山行きは、楽しさも幅広く厚みが深まるものとなりそうです。参加者は知識豊富な方々揃いで、林の中でも樹木の説明、鳥の声の主は誰々と私が歩いている列の前後から聞こえてきます。特製名札【私のは早川の住民・水生昆虫】を付けて歴史探訪、自然観察の気持ちよい一日が過ごせました。ありがとうございました。

(前田玲子)

第1回は空振りでした

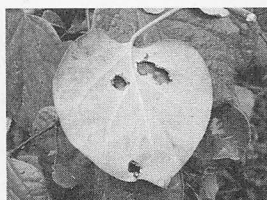
2004.5.22 参加者 21名

アサギマダラは渡り鳥のように長距離を移動する蝶です。今回、5月22日に初めて勉強会としてマーキング調査を試みました。マーキング調査は、捕まえたアサギマダラに日にちや場所などを書いて再放蝶し、「アサギマダラを調べる会」に報告します。後にどこかで誰かが再捕獲した場合、移動距離や移動日数がわかるという仕組みです。

当日は残念ながら台風2号接近の影響で天気は曇り、気温20℃という肌寒い陽気でした。10時に博物館に集合し、マーキング方法の説明や参加賞のカンバッチ配布の後、一夜城へと出発しました。すると、太閤橋を渡るとすぐに空高くにアサギマダラが！高校生の鈴木君が超ロング捕虫網を伸ばしたのですが、捕まりませんでした。この時誰かが、「今日はこれで終わりだったって・・・」と言っていたのが何かを暗示していました。

ところで、メンバーはそれぞれが土壌動物、菌類、植物、昆虫などに興味を持っているため、今回は春のハイキングも兼ねていました。途中、博物館が設置した「自然を楽しむみち」のアサギマダラ案内板付近で休憩し、約2時間かけて一夜城に到着しました。その間に、桑の実やキイチゴをとって食べたり、植物やルリタテハの幼虫を採集したりしました。一夜城でも高校生の小林君が見つけておいたポイントで、カブトムシの幼虫採集を行いました。

一夜城でもアサギマダラが空高く飛んでいたのですが、捕まえる事はできず、結局この日は2頭目撃しただけでマーキングはできませんでした。それでも確かにいるのを確認できた事や、食草のキジョランの自生地を把握できた事は次につながる収穫だったと思います。次回は10月に行い、雪辱を果たす予定です。ゆくゆくは夏休みの講座に組み入れたり、一般募集の講座にできればと考えています。(オープンラボ 松本洋一)



キジョランの食い跡と調査会のカンバッチ(松本作)

津久井町城山に春を訪ねて

2004.4.10(土) 参加者 31名

爽やかな朝、横浜線の橋本駅が植物観察会のスタート地点。バスで津久井湖展望台まで行き、おるとすぐ、登りが始まる標高375mの小さな山、城山が今回のコースである。新芽の出ている樹、出そうな樹、今は樹の形や木肌がはっきりしていて、観察に適しているのだろう。例によって、足元を見てなだらかな山道を登ってゆくと、枯れ葉の中にホウノキの葉を見つけた。思わず見上げる。これなら分かる。花が咲いても葉にさえぎられてなかなか見つからないけれど、探す事ならできそう。アサダ、これは初めて見る樹で、手でさわるとバリバリはがれてきそうな木肌、県内でも広く分布していないと聞いて嬉しくなった。フジキやケヤキなども見たが、今回はアサダが印象に残っ

た。咲いていた花では、ニリンソウ、ヤマドリソウ、ヘビイチゴ、ミツバツチグサ、ヤマネコノメソウ、マルバコンロンソウ、ナガバノスミレサイシンなど。

私は津久井湖の北側のコースを歩いて、丹沢や大山の嶺を見ていたが、手前にあるこの城山を見落としていたようで、これからは足を伸ばして、樹木も草花も豊富なこの山を四季折々訪ねてみたいと思ったことでした。

(植物グループ 碓 邦子)



植物ノート

カンアオイの不思議

山道を歩いていると、よくカンアオイを目にします(写真)。冬でも青々とした葉を付けているので目立ちます。日本から東アジアに約50種あり、日本には25種、県下には4種が分布します。そのカンアオイのほとんどが固有種で、狭い範囲に分布しているのが特色です。その理由は、極めて分布速度が遅い事が原因のようです。植物学者の前川文夫博士は、カンアオイ類の種子の広がり方は植物中最も遅く、1万年に1キロと言っています。



カンアオイ

葉の根元に花が1個咲き、その種子は親株の根元に落ちるだけ。親と競り合ってしまう、運良く少し離れた実が一人前になります。花を開くまで早くて5年、親株から10cm離れて子孫を作るのに10年はかかります。山の斜面を横へ横へと進み、この計算では100m進むのに1万年となります。しかし自然の地形は長い間に変化が有り、山が平らになったり、平地が高く隆起したり、早く広がるチャンスがあると推定され、博士は房総半島と三浦半島の地層から、カントウカンアオイの分布を計算式で割り出し、1万年に1kmと推証しました。

御存知のように植物の種子の広がり方は、風によるタンポポ、動物に着くイノコズチ、果実が弾けるホウセンカ…等、少しでも遠くへ飛ばそうと努力します。それは親元からできるだけ離し、「天変地異、疫病での一族絶滅を回避、また他地域の優秀な血統の獲得による種の維持」が目的とされています。このように種子の広がり方の最も遅いカンアオイ類、本来なら自然淘汰され絶滅の運命にあっても不思議はありません。しかしこのカンアオイ、そんなに珍しいものでもなく各地で目にします。不思議だとは思いませんか？ もしかしたら逆に親元に近い事に何かメリットが有るのでは？ この答えは皆さんにお聞きしようと思います。娘を遠くに嫁に出さず家の近くに置きたがるのが世の親の常。どんなメリットがあるのか、カンアオイに代わって考えていただけませんか？

(植物グループ 中島 稔)

城ヶ島地層観察会報告

2004. 4. 10(土) 晴 参加者 24 名

南の海からやってきたという城ヶ島地層の観察会が、講師山下学芸員、地学グループ蛸子氏を迎えて行われた。10時、城ヶ島バス停前で見どころの説明がされた。資料は12ページに及ぶ詳細なもの、1日で観察できるのだろうかと不安におもった。

◆**楫の三郎山** 出発から1分、地層に大きな穴、小さな穴が開いている。なんの穴だろうか、参加者から色々な答えが出た。1703年の元禄、1923年大正などの大地震を経て現在の高さまで隆起したが、かつては波打ち際であった。小さな穴は海水準に棲息する穿孔貝が穿ったもの、大きい穴は波が刻んだ海食洞の跡と言う。

◇**観光橋** 蛇のようにのたうち回っている地層がある。一度溜まっていた物が何らかの外乱タービランス（地震など）を受けてできたスランプ構造。海側の砂地に寄せては返す波の文様カーレントリップル（漣痕）が見える。

◆**正断層と逆断層** 側方からの圧力が掛かった場合、引っ張られた場合等参加者の理解が深まった。海食台の上の穴は？ 小石が回ってできた？ ポットホール。

……自然のなせる技、芸術作品の上で……

……なんとも贅沢な昼食となった。……

◇**スランプボール** 周りにスランプの構造がある。この地層を見てどちら側から水が流れて来たのか、分からなかった。



地層の模様（おばけだぞ！）

EPACS自然史博物館 URL <http://www.tecnet.or.jp/museum>

◆**火炎構造** 断面と平面の両方から観察。田口学芸員が生命の星・地球博物館EPACS自然史博物館「身近な自然史」に登録したこの平面模様を参加者のどなたかがプリントして持ってきた。見比べると

実物より迫力がある。田口氏はオバケと言ったとか…、意味を聞いて見たい。参加者の一人は、マガタマと言っていた。平面からでは火炎構造は想像がつかなかった。

◇**ベインストラクチャー** 海蝕台面の泥岩にある細かなひび割れ、南の島が日本列島に付加した時にできた歪みの跡との解説があった。

◆**生痕** 生物の跡、生物の糞、まさに太古の生物の生きた証であった。

◇**火山礫** 600万年前の泥岩に玄武岩や花崗岩が刺さり込んだもの、大量のスコリアもあり近くに火山があったのか？ 玄武岩は火山フロントのものか？ 三崎層が大礫に連なっている説があるが、大礫を調べると前弧ではなく背弧か？ 礫の成分を調べれば分かることだが、ここ火山礫の供給源についてはまだ研究されていない。大きな火山礫（弾）は、その重みで泥岩の中にすぽとはまり込む。礫と泥岩の接触面をよく観察する必要があると説明された。

◆**馬ノ背洞門** 大正地震前、この空洞を船が通っていたそう。現在は隆起して船は通れない。空洞右手にクロスラミナとスランプボールが見える。これらは深い海でできたのか浅い所か、参加者はまたまた宿題をいただく。

◇**海鵜展望台** 初声層の観察、上部のローム層、下部の黒い部分は初声層でここからの展望は、不整合がよく観察できる場所である。

◆**水っ垂れ** 通行止めの海岸歩道に代わって旧ユース hostel 脇を通り最後の観察地点へ。逆転地層を観察する。上下まさにひっくり返った地層である。コンボリユート（渦巻き）構造とベインストラクチャーが逆さまになっている。午前中からも感動の連続であったが、最後にこの地層を見たときは、こんなことであるのだろうか、実際目の当たりに見ているのである。とどめを刺されてしまった。いかに城ヶ島の地層は複雑か、10回以上は足を運んでいるという方が参加者の中にいらしたのもうなずけ実感した。

今回の観察会は、参加者に考えさせる課題が多く有り、宿題もいただいた。それぞれ各自が推理し考え答えを出す。それは決して正しいものでないかも知れない、しかしそこには間違った答えも存在しないと思う。それが自然界なのだから。

（地学グループ 小川治作）

友の会 NOW

地球博物館友の会では、会員と博物館とが協働しながら運営できる、自立した組織化を目指していることを一年間にわたってお伝えしてきました。現在運営スタッフは全員が無償ボランティアで活動していますが、都合の良し悪しに関わらず押し寄せる作業、会計や会員管理、そして友の会通信の発行など“自立する友の会”は相当な作業量です。博物館の企画普及課に友の会をサポートする



友の会運営のショップ（大阪市）

職員が常駐していますが、あくまでも主体は友の会ですから、“まとめ役”のスタッフは会社や家庭に居ても友の会の事務作業に追われ、こう

なるとボランティアの領域を超えた責任重大な仕事です。仕事に限られたスタッフに偏らないように運営作業を分担していますが、責任が伴うものはどうしても集中してしまう状況です。設立して8年、会員数約600名となった組織を担っていくために、スタッフの専任化とボランティアによる運営の在り方を皆さんと一緒に検討しなければならない時期ではないかと考えています。

（友の会副会長 佐藤昭男）



情報クリップ

- ★会員状況 2004.5.15 現在 (576)
個人384名、家族192世帯
- ★分科会・植物観察会の名称が5月から「植物グループ」に変わりました。
- ★博物館休館日のお知らせ
7月13日(火)は、館内整理のため休館。

ボランティアメッセ2004に参加して

5月4日・5日に日本科学未来館で開催された“ボランティアメッセ2004”「つながりあう未来のミュージアム」に神奈川県立生命の星・地球博物館のボランティアとして参加しました。4日は地球博物館の紹介ポスター掲示やパンフレットの配布準備、活動事例報告会と情報交換会に出席し、5日のメッセ本番では地球博物館のコーナーで博物館の紹介やボランティア活動をPRし、子どもたちには折り紙で恐竜の作り方を教えました。参加34館園、紙すき体験やわら細工作り等、魅力的な企画が目白押しでした。私は、来館者の少ない時間を利用して、茅野市尖石縄文考古館の勾玉作りと滋賀県立琵琶湖博物館のヨシ笛作りを体験し、よこはま動物園ズーラシアコーナーではボランティアのサービスを知る良い機会になりました。

琵琶湖博物館のボランティアは「フィールド・レポーター」と呼ばれていて、琵琶湖周辺の自然を観察して調査結果を県民に知らせるというまさに「レポーター」で、ボランティアという言葉では漠然としてしまう活動の内容がよくわかる名称であり、またボランティアという言葉を使わないことで、敷居の高さや抵抗を感じる人にとっては馴染みやすいと思われました。江戸東京たてもの園では、ボランティア活動の拠点である囲炉裏の通称「ひじろ」を付けて「ひじろ会」としていま

した。博物館のボランティアに通称がついていると親しみやすく良いのではないかと考えてみたのですが、地球博物館では活動が多岐にわたり、難しいなと感じました。

今回いろいろな博物館のボランティアの方々と交流できたことで、実は博物館によってボランティアの組織や条件など、全く違うことを初めて知り、改めて地球博物館のボランティア活動の自由度の高さ、恵まれた環境で活動が行われていることを認識しました。また、あえてボランティアという名称を使わない館があることは大きな驚きでした。

日本科学未来館のボランティアはおよそ8,000人、今回は若い人が中心となって企画されたらしく、非常に活発でとても素晴らしいメッセでした。

（オープンラボ 稲垣香穂里）

ボランティアメッセの紹介

このボランティアメッセは、2002年度に兵庫県立人と自然の博物館がNPO法人・人と自然の会とともに行ったのが始まりで、2003年度は東京都江戸東京博物館で開催され、今年度日本科学未来館が引き継いで計画したものです。今回当館からは、友の会会員で博物館ボランティアとしても活動している稲垣香穂里さんと深澤良子さんに参加していただきました。博物館友の会も、博物館に協力・支援するボランティア活動です。

（学芸員 奥野花代子）

行事への参加申込み方法 —詳細はチラシをご覧ください—

- ・受付は 各行事案内の申込み方法に従い、普通はがき、または往復はがきでお申込みください。
FAXやEメールでは受け付けできません。
- ・記入は 行事名／参加者全員の氏名／年齢（学年）／会員番号／代表者の住所、電話番号を明記、
指定の必要事項などをご記入ください。
- ・宛先は 生命の星・地球博物館 友の会事務局（主催者名を明記）までお送りください。
- ・締切は 各行事案内に指定の期日までにお送りください。
- ・その他 行事案内に指定がある場合のみ、FAXやEメールでも受け付けができます。
- ・問合せ 各行事案内に記載されている担当者へ（なるべく夜間に）ご連絡ください。

行 事 案 内

■第61回 サロン・ド・小田原

『火砕流のお話』

笠 間 友 博（講師）

箱根火山で約6万年前に発生した火砕流（いわゆる東京軽石〔TP〕にともなう火砕流）は、相当寒冷な海面低下期の噴火ですが、現在の神奈川県相当地域をほぼ覆い、その痕跡は多摩丘陵を越えた東京湾側にも認められます。一方で噴火の関心が高まっている富士山でも、最近火砕流がしばしば発生している事がわかってきました。「お話」は箱根火山の東京軽石に伴う火砕流堆積物を題材に、火砕流について初心者の方にも分かり易く実験もまじえてご説明したいと思っています。

【日 時】平成16年7月10日（土）16:30 受付

【場 所】生命の星・地球博物館1F 講義室

【講 演】17時～18時（西側講義室）※申込み不要

【茶話会】18時～19時半（東側講義室）※事前申込制

【演 題】『火砕流のお話』

【講 師】笠間友博（生命の星・地球博物館）

【参加費】講演は無料。茶話会は1000円／人

【申込み】講演会はどなたでも参加できます。

茶話会に参加の方は友の会事務局へ。

【問合せ】田口 tagu@nh.kanagawa-museum.jp

『夏休み昆虫探検隊』

日 時：7／30～31（金・土）

場 所：長野県上伊那郡高遠町周辺

《地学グループ》岩石標本を作ろう 2004

日 時：一日コース 7／25（日）9:30～

半日コース 8／21（土）午前・午後

場 所：7／25 酒匂川河原・博物館講義室

《オープンランボ》小さな探検隊ほか

日 時：8／7（土）、8（日）、14（土）、21（土）

場 所：博物館内および博物館周辺

《自然倶楽部》“水飢鬼を育てよう！”Part 2

日 時：8／21（土）9:30～15:30

場 所：博物館横の早川河原

《植物グループ》フジアザミの群落を訪ねて

日 時：8／27（金）9:10～15:00 頃

場 所：富士山御殿場新5合目から御殿場へ

《地学グループ》佐渡島地学特別巡検

日 程：9／3（金）～6（月）

場 所：佐渡島



次回の通信発送日は、8月28日（土）10時から。場所は当日職員通用口に掲示します。

発行：神奈川県立生命の星・地球博物館 友の会

編集：友の会広報グループ

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

TEL：0465-21-1515 FAX：0465-23-8846

Eメール：tomonokai@nh.kanagawa-museum.jp

交通：箱根登山鉄道（小田急線箱根湯本行き乗入れ）入生田（いりうだ）駅から徒歩3分。

国道1号線「地球博物館前」 駐車場は博物館地下（16:30閉門）、博物館箱根側屋外の2箇所。